

「現代中国学の新たなパラダイム：コ・ビヘイビオリズムの提唱」に対するコメント

朱 安新

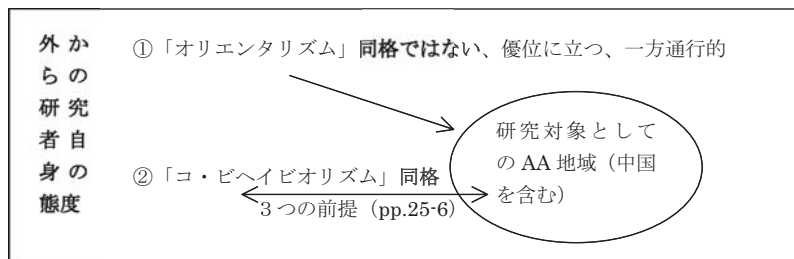
(愛知大学 ICCS 研究員)

1940年代前半のお生まれで中国研究に造詣が深い加々美光行教授の論文(2007)を、1970年代後半(ポスト文革)生まれで「地域研究」にはまったくの門外漢である評者は、高く聳えている山を恐れながら見上げるように尊敬の念で、素直に拝読した。

その際、評者の持つ問題意識は、以下の3つだった。すなわち、(1)なぜ「オリエンタリズム」を前提とした「地域研究」は、「コ・ビヘイビオリズム」を前提とした「国別学」へ転換しなければならないのか、(2)「コ・ビヘイビオリズム」という新しい「方法」での「国別学」が目指す研究の方向や目的は何か(どのような課題を研究し明らかにしていくのか)、(3)「コ・ビヘイビオリズム」という新しい「方法」での「国別学」にとって、「学」として成長していく「動力」はなにか。以下の内容で、この3つについて所見を述べる。

(1)について

- ・ 加々美論文は、「オリエンタリズム」を前提とした「地域研究」を批判し、今後、中国研究を行なう際の外部からの研究者の態度が「コ・ビヘイビオリズム」になるべきだと認識し、そしてそれを前提とした「国別学」の確立を提唱した。現在の時点で、この「コ・ビヘイビオリズム」は、研究対象である中国の実態をとらえるための規範的概念として提唱されていると評者は思う。
- ・ 「オリエンタリズム」と「コ・ビヘイビオリズム」の相違を図化すると、下図となる。



- ・ 「オリエンタリズム」では、研究者「自分自身の意志的な主体性は認めながら、研究対象の意志的な主体性は認めないという態度(ビヘイビオ)が顕著に現れる」p.24、そして「実際には、『オリエンタリズム』の病弊を克服した本格的な『現代中国学』や『アジア学』の方法論は今なお未確立の状況にあると言わざるを得ず、現実の中国研究、アジア研究、『地域研究』全般の世界認識は、依然『オリエンタリズム』の弊を引きずったままの状況にある」p.15-6 と、既存の知識体系のあり方に対する批

判は、分かった。

- ・ しかし、そこから、たとえば中国研究に際して、なぜ研究者の姿勢が「コ・ピヘイビオリズム」へ転換しなければならないか、その転換の必要性・切実性について詳しく説明されたい。
- ・ そして、研究者の姿勢が「オリエンタリズム」から「コ・ピヘイビオリズム」に変更することによって、「地域研究」 p.23 に代わって「学」（中国学を含む）が形成されることとの回路を提示されたい。

(2)について

- ・ 「コ・ピヘイビオリズム」という新しい「方法」での「国別学」が目指す研究の方向や目的は、「非西欧世界」的な「近代化論」を捉えていくことにあるか。

(3)について

- ・ 「オリエンタリズムが今日に至るまで強固な形で存続し得ている理由は、今日、かつてに比べて自由主義リベラリズム＝近代主義の『自己実現と自己拡張』による地球規模での勝利を疑う者が格段に減少したこと、またそれに伴いオリエンタリズムの認識構造だけでなく存在構造もが欧米世界だけでなく発展途上諸国世界の内部にまで強力に復活してきていることによる」 p.25 としている。
- ・ このような現実の背景にもかかわらず、加々美論文（2007）で提唱された「現代中国学の新たなパラダイム」である「コ・ピヘイビオリズム」が、「ある一時代の人々のものの見方・考え方を根本的に規定している概念的枠組み」（スーパー大辞林による「パラダイム」の解釈）に、どのようになっていくか。その際、「新たなパラダイム」を押し広げていく「力」、それともそれが自ら浸透し広がっていくための時代的な要請が、どのようなものか。「学」にとってそれが育っていく実際の土台が薄いことによって、「コ・ピヘイビオリズム」が結局、理念の次元で終わってしまうこともありうる。

そのほか、現代中国学の新しいパラダイムが「固有の一般理論（ディシプリン）」のほかの学問分野のような専門科学との関連性は、どのようなものか、その際、中国学の「学」として独自性はどのようなものか、について、教示をいただきたい。

シンポジウム当日は、上に述べた所見を踏まえて、会場で口頭発表を行なう。

最後に、現代中国学の新しいパラダイムをめぐるシンポジウムに参加する機会に恵まれたことに、深く感謝いたす。